

比叡山延暦寺は琵琶湖を見渡す絶景の地に建立され、根本中堂の本尊は水の信仰と深くかかわる薬師如来像です。また比叡山仏教の影響で、県内では霊水の湧出地などに薬師如来がお祀りされていることが多く、琵琶湖から出現したと伝える仏像も多く見うけられます。琵琶湖は仏教美術のみならずともあるのです。

1. 比叡山仏教と「根本薬師」

滋賀県の仏教美術史は、比叡山仏教の大きな影響のもとで展開しました。近江国滋賀郡(現在の大津市)の渡来系氏族に生まれた伝教大師最澄は、785(延暦4)年に比叡山に入って草庵を結び、自ら刻んだ薬師如来像を安置したといわれます。この像は「根本薬師」と呼ばれ、延暦寺根本中堂の本尊として信仰を集めました。

平安時代末期に編纂された歌謡集『梁塵秘抄』の中に、「近江のみづうみ(湖)は海ならず、天台やくし(薬師)の池ぞかし」という歌が採録されています。仏教の世界観の中で、薬師如来は「瑠璃光如来」とも呼ばれ、青く輝く水の世界の教主として、東方の薬師浄土におられるとされています。比叡山の東方には清らかな水をたたえ、海のように雄大な琵琶湖がひろがっていますが、その琵琶湖が実は「根本薬師」を本尊とする薬師浄土の宝池なのだと歌っているのです。

最澄のひらいた天台宗の教えは平安時代中期以降、近江一円に広がります。そして、それとともに「根本薬師」を模した薬師如来像を本尊とする寺院が各地に建立されていきました。滋賀県内には重要文化財に指定されている薬師如来像が45件を



写真3-11-1 重要文化財木造薬師如来立像
(草津市宝光寺所有)
平安時代に造像された「根本薬師」の模刻像



数えますが、その数は京都府や奈良県を上まわり、都道府県別で全国第1位を占めています。これらの8割が平安時代の作であり、かつ湧水地や農業用水の水源に祀られている事例の多いことが注目されます。湖南市の善水寺、甲良町の西明寺、栗東市の東方山安養寺、野洲市の宗泉寺など霊水の湧き出る地で、平安から鎌倉時代にかけて造像された重要文化財の薬師如来像が今も地域の信仰を集めています。琵琶湖とその水系の豊かな水に恵まれて暮らす近江の人々の間には、薬師如来を通じた水信仰がさかんであると知ることができます。

2. 琵琶湖から出現した仏像

また、琵琶湖のほわりには、湖中出现伝説をもつ仏像が多く存在します。一例として、高島市の長谷寺の「縁起」を紹介しましょう。むかし、同地の三尾山に高さ30メートルを超え、常に光を放つクスノキの巨木があったといえます。あるとき、この巨木が野火に焼かれて琵琶湖へ流れ、大津の浦に漂着しました。この巨木に霊性を感じた僧・徳道は、727(神亀4)年に一本の木から三体の仏像を造ります。巨木の末の部分から造ったのが大和国長谷寺と讃岐国志度寺の本尊で、根幹部分で造像したのが近江国長谷寺の本尊であると伝えられています。この「縁起」と同じ内容の由緒は、奈良県長谷寺、香川県志度寺それぞれの縁起絵巻(ともに鎌倉時代の制作で、重要文化財)にも描かれています。

「琵琶湖から現れた」とされる仏像は、他にも多くあります。県内では大津市聖衆来迎寺の薬師如来立像(重要文化財)、近江八幡市桑実寺の薬師如来立像、彦根市龍潭寺の十一面観音像、愛荘町蓮泉寺の観音菩薩像、県外では静岡県浜松市の龍潭寺十一面観音像などです。

豊かな水の恵みを受けた近江の地には、琵琶湖や霊水への信仰にゆかりの深い仏像がたくさんあるのです。琵琶湖水系は、まさに「仏像のふるさと」でもありました。



写真3-11-2
重要文化財銅造薬師如来立像
(大津市聖衆来迎寺所有)
琵琶湖から現れたと伝えられています